



千葉大学大学院医学研究院 腫瘍病理学

千葉大学大学院医学研究院腫瘍病理学の歴史は、明治23年（1890年）に初代筒井秀二郎教授が病理学を開講した時に始まります。筒井教授は、コールタールをマウスの皮膚に塗布することにより皮膚癌を発生させるという画期的な業績を上げました。この研究は化学発癌という多くの癌の原因の本質を突いただけでなく、その後の多数の癌原性物質発見の端緒となりました。昭和2年に病理学が2講座制に移行されるにあたって、石橋松蔵教授が初代病理学第一講座の教授に就任しました。

その後、滝沢延次郎教授、井出源四郎教授、三方淳男教授と引き継がれ、1998年から張ヶ谷健一教授が就任し今日に至っています。医学部の大学院化に伴い、平成13年（2001年）より大学院腫瘍病理学と改称しました。今年で開講以来百十余年を経過したことになります。

教室員は教授1、助教授1、助手2、技官2の職員に秘書、大学院生、国内外留学生、研究生を加えた総勢約15名です。日常の業務として、剖検、外科病理学、実験病理学、学生教育を行っています。

研究面では、接着分子 CD44に着目しこの分子による細胞運動制御の細胞内の分子機構について、分子生物学的、細胞生物学的手法を用いて研究しています。この研究は癌転移・浸潤の理解につなげることを目標にしています。最近この研究は自然免疫系制御機構の研究にも発展してきています。さらに種々の細胞系の分化の制御さらにはいくつかの細胞の発がんに関わる Notch シグナル伝達系についても研究しています。この研究では、Mastermind という新しい制御因子を発見しさらにその機能を解明することに成功しました。

病理業務としては、大学病院、成田赤十字病院、千葉県こども病院、放射線医学総合研究所、旭中央病院、千葉県救急医療センター、済生会習志野病院、川鉄病院、上都賀総合病院などにおいても生検・剖検業務を行っています。病理組織診断は12000件/年、年間約100体の剖検、10回/年のCPCを教官および大学院生が担当しております。